

帰有光の「文」理論と古文の修辭法

——『文章指南』よりみた——

鷲野 正明

帰有光（字は熙甫 号は震川 一五〇六～一五七二）は、六十歳の時に、天と人が一つになれば、文は永遠に存在すると主張して、文壇の領袖の王世貞（一五二六～一五九〇）を「妄庸の巨子」と批判したが、すでに三十歳の時に、道と文とは一如であるという文論を持っており、しかも道の端緒は、人の誰かが懐く情であるとしていた。^(注1)

この文論は、帰有光の文集中の序跋等から帰納されたものであるが、文構成などの技巧論をも含むより詳しい文理論は、『文章指南』^(注2)に拠って窺い知ることができる。『文章指南』は、「目錄」「総論」「文章体則」「古文選集」の四部からなり、「古文選集」は春秋時代の左丘明から明の王陽明にいたるまでの「古文」百二十編が、仁、義、礼、智、信の五集に分けて収載されている。^(注3)

目錄に続く「総論」は、

看文字法（作品を看る方法）

看歴代名家文法（歴代名家の作品を看る方法）

論作文法（作文の方法）

論文章病（文章の欠点）

となっているが、「看歴代名家文法」以外は宋の呂祖謙（一一一三～一一八二）の『古文關鍵』と全く同じである。^(注4)

「文章体則」は、「通用則」以下総計六十二則が掲げられ、根本原理から立意論、文勢、文構成、文の終結の方法へと、体系的にまとめられている。この体則をより分かりやすくするための実例集が「古文選集」であり、各作品の題下にその文の体則が示され、作品の最後に「震川云」というかたちで、体則の説明がなされ、その他の補足・注なども施されている。

帰有光の「文」理論を探るためには、この『文章指南』を様々な角度から分析する必要があるが、本稿ではまず、「文章体則」^(注5)によりつつ、文の原理と修辭法についての概要をみることにしたい。尚、各節の小見出しと「説」とあるものは、内容に即して便宜的に付けたものである。また、「文章体則」と「古文選集」中の体則説明との間に文字の異同がある場合は、内容がより理解しやすい方を採った。

一、文の原理

「通用則」三条・附則二条が文の原理を述べたものとなっている。

三条のうちの第一条目が文それ自体の原理を述べ、残りの二条は、文を作るに際して作家に要求されることと、文の効用を主眼として作家に備わっていないかならないことが述べられている。

附則が、文自体について述べたものと、文を作るに際して作家に要求されることとなっているので、この「通用則」は、「文」のより根本的な原理と、作家の資質論とに二分することが可能である。

作家の個性、気質、人格なりが文に反映されることは『文心雕竜』以来の文学論で明言されていることであり、この三条も両面から解釈できることは言うまでもない。

文理説

文章は理を以て主と為す。理得れば辞順ひ、文章は自然に群を出てて萃を抜く。程伊川の「周易伝序」、王陽明の「博約説」の如きは、此れ皆義理の文にして、聖道の微を卓見する者なり。

文は「理」が主であり、「理」が体得できれば、言葉はそれに順い、文は自然に群を出て萃を抜く、という。その「理」とは、文脈から、聖人の道、であることがわかる。群を抜く文の一例として、「周易伝序」「博約説」という義理の文、すなわち議論・論説文が挙げられて

いるが、文体としては、書簡や送序、碑文、記などでもよいこと、「古文選集」によって明かである。

聖人の道の具現を文の目的とすることは、韓愈、柳宗元以来の古文家の一般的な主張であるが、「文章は理を以て主と為す」というのは斬新である。『典論』『論文』で提出された「文気説」にたいして、「文理説」と呼ぶことができれば。

聖人の道とは、社会の平和・安定を目指すものであり、絶えず世教と関わりをもつ。そこで、附則の一条は、次のようにいう。

文章は世教に關はるに足らざれば、工みなりと雖も益無し。

養気説

文を為るは必ず氣を養ふに在り。氣中に充ちて、文外に溢る。蓋し自ら知らざる者あり。諸葛孔明の「前出師の表」、胡濙菴の「高宗の封事に上る」は、皆沛然として肺腑中より流出し、文を期せずして自ずから文なり。正氣の発する所に非ずと謂はんや。

文学論に「氣」が現れるのは、『典論』『論文』の「文気説」が最初であるが、ここでの「氣」は、「文気説」という作家の個性や気質と解釈するよりは、宋の文天祥（一二三六～一二八二）の「正氣の歌」の正氣、すなわち孟子の「浩然の氣」に基づいた、天地間の万古不變の氣、ひいては聖人の道の具現化のための「氣力」とみたほうがより妥当かと思われる。

才識兼備説

文章は識に非ざれば以て其の本を厚くするに足らず、才に非ざれば以て其の用に利するに足らず。才識俱に備はりて、文字自ずから高人に会す。

「其の本」とは、理、すなわち聖人の道であり、「其の用」とは聖人の道の運用ということである。

「氣」「才識」は、ともに作家の氣質・個性と密接な関係があり、これを充分に發揮すれば独自の地歩を占めることができる。そこで、附則では、

古人文を作りて、専ら地歩を占む。
という。

二、総論

「文」はいかにあるべきかを論ずるもの。

(一) 立論正大

内容・立論が正当であること。

凡そ学者文を作るに、須らく議論正大なるべし。台閣の氣象ありて、方めて佳なり。

(二) 用意奇巧

意匠が、珍しく、巧みであること。人の意表をつく工夫がされていること。

文章用意庸庸なれば、人の厭を起し易し。須らく人の意表より出でて、方めて高手となすべし。李斯の「逐客を諫むる書」の如きは、人を借りて己を揚げ、小を以て大に喩ふ。別にはれ一種の巧思なり。

「人を借りて己を揚げ」る手法は、第三節「立意論」の「抑揚則」に連なり、「小を以て大に喩」える方法は「譬喩則」に連なる。

(三) 遣文平淡

表現があっさりしていること。

文章 意全く勝れば、詞愈々朴にして、文愈々高し。意勝らざる者は、詞愈々華にして、文愈々鄙なり。

意は内容、詞はことばをいう。曾鞏の「戦国策目錄序」は、一奇語一怪字もなく、読むと太羹や玄酒を口に含んだときのように至味がある、という。

(四) 造語蒼勁

文字を選択し句を練るときは、熟成した力強いものになるようにする。佶屈聱牙でもないけなし、稚拙でもないけない。

文を学ぶの初め、先づ鍊句を学ぶ。佶屈聱牙の人をして句読すべからざらしむるを貴はずと雖も、亦た要ず稚筆を脱去して方めて

好し。

左氏及び秦漢唐宋明の名家の文は、それぞれ見るべきものがあるが、その詞法は、皆力強い。ことに揚雄の「嘲を解く」と孔稚珪の「北山移文」の二篇は、語句が老鍊だけでなく議論もまた高古である、という。

(五) 叙事典瞻

叙事の仕方が正確で、目前で見るかのように委細を尽くす。学者の文を作ること、最も叙事に難し。古今叙事を善くすと称する者は、惟だ左氏と司馬氏のみ。

(六) 辞気委婉

語気が切迫せず、やわらかであること。
秦漢以下、聖人を去ること漸いよ遠し。故にその詞気、往々迫切の病有り。惟だ左氏の載する所の諸国往來の詞と、君臣相告げ相謀るの語詞のみ迫切せずして意も亦た独り至る。

(七) 神思飘逸

心を自由に働かせ、おもいを存分に表白する。
古今の人物の風流を論ずるは、惟だ兩晋のみを盛んなりと為す。故に之を文章に発するに、神思自然にして飘逸なり。

三、立意論

持論をどのようなかたちで表現し、強調するかを論ずるもので、比喻法以下の四法がある。

総括——立意貫説

文を作るには、須らく大頭腦を尋ね、意の定まれるを立得すべし。然る後遣詞發揮し、方めて氣象渾成す。

(一) 比喻法

譬喻則がこれに当たる。こまかくみると次の七法がある。

(1) 持論を一切出さず、もっぱら比喻を用いてさとらせる。

韓愈「雜説」一、四

(2) もっぱら比喻を用い、末の一句に持論を含ませる。

韓愈「科目に應ぜし時人に与うる書」

(3) もっぱら比喻を用い、末の数句で持論を主張する。

柳宗元「捕蛇者の説」

(4) 比喻と持論とを半々に織り混ぜる。

韓愈「後十九日復た宰相に上る書」、柳宗元「種樹郭橐

駝伝」「梓人伝」、蘇軾「稼説」

(5) 比喻を軽く用いて、持論に帰納する。

韓愈「温処士の河陽軍に赴くを送る序」

(6) 最初と最後に持論を述べ、中間に比喻を用いる。

蘇洵「明論」

(7) 比喻を用いて軽く説き、持論を引き起こす。

蘇軾「李氏山房藏書記」

(二) 引用法

総括——引証則

経伝の文句や古人の言説を引用する場合には、

凡そ議論、或いは経伝を引証し、或いは古人を引証す。此れ文章の常格なれば、須らく精当を用ひ得るを要すべし。

と、精確を期すべきことをいう。

しかし、文意を強調するためには、無いものを有るかのように引用したり、経伝を都合のよいように解釈して引用する必要性も出て来る。そのような方法に、以下のものがある。

(1) 將無作有則

経伝中には無いのに、有るかのように引用する。

凡そ議論の援引、固より精当を以て貴しと為す。然れども亦た索引来説する者有り。之を、無きを將て有りと為す、と謂ふ。

具体的な例として、韓愈の「重ねて張籍に答ふる書」が挙げられている。文中に「夫子の言に曰く、『吾れ回と言ふこと終日、違わざること愚の如し。即ち其の衆人と弁ずるや、有り』とあるが、夫子はかつて衆人と弁じたことがあったであろうか。これこそまさしく將無作

有の法である」という。

(2) 化用経伝則

経伝を自己流に引用する。

凡そ文字の経伝を引用するは、之を塵腐に失し易し。惟だ欧陽永叔の「王陶の序」のみは、全く易象の点化疎通を用ひて、議論も亦た好し。文章此れを以て、方めて文章と成る。

(3) 引事論事則

古人の事迹の得失を論ずる場合、得を論ずるときには失を援用し、失を論ずるときには得を援用する。

古人の事迹、大率相類す。特だ得失の異なる有るのみ。故に古の得を義するには、須らく失なる者を援きて以て之を証すべく、古の失を義するには、須らく得なる者を引きて以て之を証すべし。

(三) 人物批評法

人物を批評して、持論を提出・強調する方法。

総括——尚論成敗則

凡そ古人の功罪を論ずるに、須らく我をして此の時に生まれ、此の位に居り、此の事を処せしめ、当に如何に処置すべきかを思量するを要すべし。必ず長策有りて、方めて可なり。只だ能く人を責むるが若きは、亦た高手にあらず。

というように、人を批判する場合には、その人の置かれた立場に立つて考え、長策があった場合に批判すべきである。

人物を批評する方法は、「抑揚則」であり、細かに見ると、次の五法がある。

- (1) 先に批判して、後に賞賛する
韓愈「諍臣論」「范增論」「荀卿論」
- (2) 先に賞賛して、後に批判する
司馬遷「項羽本紀贊」
- (3) 批判・賞賛を併用する
韓愈「圻者王承福伝」
- (4) 賞賛中に批判する
韓愈「浮屠文暢師に与ふる序」
- (5) 批判中に賞賛する
韓愈「孟尚書に与ふる書」
- (四) 駕空立意
虚構によって新意を出す。

蘇明允の「春秋論」、天下の權を以て魯に与ふるの意を揣摩して、一段の議論を作す。「高祖論」、呂氏を去らずの意を揣摩して、一段の議論を作す。当時夫子と高祖の意、未だ必ずしも此くの如からず。皆是れ空に駕して自ずから新意を出だせり。

四、篇法論——一

一篇の構成法を論ずるもの。

総括——字少意多

字数が少なく、文が簡潔であっても、意を十分に尽くす。

司馬君実の「諫院題名記」、僅か百余字にして諫意已に悉くす。文の簡にして切なる者なり。

(1) 一反一正

肯定的な意見を述べるさいには否定的な意見も述べ、否定的な意見を述べるさいには肯定的な意見も述べる。

凡そ議論事を好めば、須らく一段の反説を要すべし。議論事を好まざれば、須らく一段の正説を要すべし。

この方法をとると、文勢も円活になり、義理も精微になり、意味も悠長になる、という。

(2) 正反翻応

肯定的な意見を提出した後、何字かを換えて、相對するように否定的な意見を述べる。

文章に正説一段の議論有り。復た数字を換へて、反説の一段、上と相對せしむれば、読者但だ其の精神を覚え、其の重疊なるを覺えず。

(3) 前後相応

先にいくつかの命題を立て、後にそれに應じるように、論を展開する。

凡そ文章、前に数柱の議論を立て、後に宜しく補応すべし。或いは意思未だ尽きざれば、再三すと雖も亦た可なり。只だ転ずるこ

と好を得るを要す。

こうすると、文に情がこもり、章法も均整がとれるという。

(4) 総提分応

先に大意を述べておいて、のち段階を逐って論を展開する。

文章、大意を総て提すること前に在り、中間段を逐って分応する者有り。

章法が最も整う、という。

(5) 総提総収

先に大意を述べ、中間に段階をおって論を展開し、最後に結論を述べる。

賈誼の「先醒篇」、前に総て大意を提し、中の三段に分応し、末又た一総を作す。

(6) 逐事条陳

条ごとに時務を述べる。

諸葛孔明の「後出師の表」、通篇条ごとに時務を陳ぶ。

(7) 一級高一級

下から上へと順次論を積み重ねる。

文字、下自り上に説くこと、九層の台に登り、漸く其の頂に陟るが如し。是れ一級高一級と謂ふ。

(8) 一歩進一歩

卑近なところから説き起こし、だんだんに核心に触れていく。文字、浅由り深に入ること、万里の途を行き、漸く至る処に到る

が如し。是れ一歩進一歩と謂ふ。

(9) 先虚後実

冒頭に命題を掲げ、後に実証する。

謝疊山云ふ、文章先づ冒頭を立て、然る後事に入る、と。又た是れ一格。

(10) 先疑後決

先ず疑問を提出しておいて、それに答えるかたちで持論を述べる。

文章手を下す処において、最も直突を嫌ふ。須らく先ず疑詞を以て説き起こし、然る後正意を以て之を決すれば、方めて文勢曲折の妙を見るべし。

五、篇法——二

文体を特に指定するものをここに集める。

△議論文▽

(1) 設為難解

難しい問を設けておいたのち、解明する。

凡そ論弁の文字を作すに、須らく問難を設為し、而して己が意を以て分解す。

(2) 含意不露

すべてをすぐには説き明かさず、疑義を挾んだのち、どちらでもよいと言って読者の選択にまかせる。

一等の弁論の文字有り。全て直ちには説破せず。尽く是れ疑を設け、伴って兩可の詞を為して智者の自ら択ぶを待つ。

(3) 設為問答
問答を設ける。

又た一等の文字有り。直ちには發揮せず。乃ち孟子の文法を学び、問に随ひ答へに随ふ者、亦た是れ一格。

△弁史文△

歴史事実を嚴密に論駁し尽くすことはできないので、最終の結論はさほど嚴格には言わず、緩やかにする。

凡そ弁史の文字、前面に正理を把むと雖も、他に逃避する処無きを得難し。末に当に一步を放寬すべし。充分に結を執るべからず。

六、文勢論

文の勢いを論ずるもの。

総括——文短氣長

文章が簡潔で短くとも、氣は長くなければならない。

文章簡短なるは、氣の長きを得難し。

(1) 文勢層疊

同一語句、同一句法が次々に何度も繰り返される。

峰巒層出するが如く、波濤疊湧するが如し。之を読めば、心を快ならしめ意を暢ならしめて、其の煩を覚えず。

(2) 文勢如貫珠(貫珠の勢い)

一の結論から二の結論が導きだされ、二の結論から三の結論が導き出される、というように、前の結論から次の結論が次々に導き出され、しかも意脈が一貫している。

上に結んで下を生じ、意脈相連なる。是れ貫珠の勢いと謂ふ。

(3) 文勢如走珠(走珠の勢い)

転換が円滑で、滞ったりさえぎられたるすることがない。

転換員活にして、略ぼ滞碍無し。是れ走珠の勢いと謂ふ。

(4) 文勢如擊蛇(擊蛇の勢い)

いくつかの命題を順次解決してゆき、最後に一篇の結論を導き出す。首を救い尾を救い、段段に力有り。是れ擊蛇の勢いと謂ふ。

(5) 文勢如破竹(破竹の勢い)

同一字を含む同一句法の句が連なり、一句一句が堅く結び付いている。

句法連なり下り、一句一句を緊す。是れ破竹の勢いと謂ふ。此の碑(潮州韓文公廟碑)の首めの段に連なり下る五個の「失」の字、之に似たり。

七、字句法

字・句について論ずるもの。

総括——字煩不厭

何度同じ字を使っても、句法に変化をもたせて、読む者に厭気を起こさせないようにする。

文章字を下して重畳なれば、未だ人の厭を起こさざる者有らず。惟だ韓退之の「孟東野を送る序」、凡そ六百二十余字のみは、鳴字四十にして、之を煩に失せるに似たり。然れども句法変化すること二十九様、愈々読んで愈々覚えす。誰か文章の妙は、転換の間に在らず、と謂はんや。

総括——下字影状

事に託して論を立てるさい、用字用意は事とびつたりと当てはまっていなければならぬ。

凡そ文章、事に託して論を立つる、其の用字用意、須らく事と親切なるを要すべし。

(1) 句法長短錯綜

字に多と少を、句に長と短を錯綜させる方法。

字に多少有り、句に長短有り。之を読めば尤も起伏有り、頓挫有り、波瀾有るを覚ゆ。

(2) 下句載上句

上の句と下の句とが釣合がとれるように。

凡そ文章、上句重く下句軽ければ、或いは上句の為に庄倒せらる。須らく上下相称ふべし。

(3) 綴上生下

持論や疑問を提示しておいて、後の立論や結論を導き出す。

文章、前面に各々の意を分説し、後又た総て下の立論を紐過す。

(4) 疊上転下

上文で一つの説を断定的に述べ、下文ではその内容を指し示す核となる字句に焦点を当てて、重ねてその説を解明する。

上文に一句の説話有り、下は頂上に即きて一句を申説し、過文相似たるが如くす。是れ疊上転下と謂ふ。

(5) 攔截上文

勢いよく連なってきた句を、絶妙の句によって断ち切る。

凡そ句法、直ちに下り来ること、良馬の峻嶺を下るが如く、輕舟の長湍を下るが如きも、若し一句の攔截無くんば、便ち文章を成さざらん。

(6) 双関句法

相對する字句をならべる方法。

双関の文法、諸家惟だ韓文喜んで用ふ。

(7) 兩柱通文

柱となる二つの命題を相前後して提示したのち、その二つの柱を交互に展開させる方法。

王陽明の「玩易窩記」、篇内易理を發明す。而して觀象玩詞・觀變玩占を以て柱を立て、下は即ち双つながら承けて竹節のごと推去す。是れ兩柱通文と謂ふ。

(8) 綴応前語

前に使用した語句と関連のある語句を用いて、前段と呼応するよう

にその内容をまとめる。

凡そ文字、緊関の語句有り。前面に已に提出すると雖も、又た後面に於て説を繼つませ、前と相応ぜしむ。

(9) 疊用繼語

繼語(関連のある語)を疊み掛けるように使用する。

歐陽永叔の「秦誓論」、凡て七段。首めの段六意、六の繼語相応ず。此の様な文法、論体に於て尤も是なり。

八、題目と内容との関係

題目と内容との関係を論ずるもの。

総括——死中求活

題意にそつた結論が出て、更に新たな内容を盛り込む。

凡そ文字、議論已に至る所に到るも、更に一段の議論を出だして、題意の尋常に溺れず。是れ死中活を求むと謂ふ。

(1) 相題用字

題目を補い助ける文字を文中に用いる。

題の宜しき所に因りて字様を借用す。正式に非ずと雖も、亦た巧思の在る所なり。

(2) 題外生意

平凡な題目でも、内容は充実させる。

題意平常にして、若し此れに溺れて發揮すれば、文字却って味美

無し。須らく題外に於て議論を生じ、以て題の及ばざるを相あけて方はめて佳なり。

(3) 駁難本題

題目の指し示す内容が偏っている場合には、文中でそれを論駁して是正する。

凡そ題目、意見偏枯なれば、便すなわち当に難を駁して正に帰すべし。

(4) 回護題意

人や事の都合を題とした時には、文中で人や事を弁護する。

凡そ聖人の是こゝに処あらざるを議論するには、須らく正理を以て回護すべし。

九、終 結 法

一篇の終結の方法を論ずるもの。

総括——結意有余

文末をゆるがせにせず、文が終わっても、余韻があるように。

人結末の処に於て忽略多く、文の工みなるを用ふること尾に在らずと謂ふは、殊に一篇の命脈・帰束此に在るを知らず。須らく言の尽くる有りて意の窮まり無きを要すべし。

総括——竿頭進歩

文末は軟弱であつてはいけない。百尺の竿の先から更に一步でも進むように努力しなければならない。

文章結束の処、最も軟弱を嫌ふ有り。又た百尺の竿頭より、更に一步を進むべし。

(1) 結末括応

叙述してきたことを総括して、大意を述べる。

凡そ文章、前面に散々鋪述し、後に宜しく大意を経括し、前と相応じて、方めて收拾の処を見るべし。

(1) 結末推原

篇内は実証的に論を進め、結末でその原因を考究する。

篇内は但だ事に拠りて議論して、結末に於て復た其の由を究む。之を推原文法と謂ふ。

(3) 結末推広

題意にそつて論じ終つたあと、類例によつてその論に奥行きをもたせる。

題意此に止みて、結末に於て復た類に因つて其の余に及ぶ。之を推広文法と謂ふ。

(4) 結末垂戒

人事のおろかさを叙述した文は、文末に訓戒を垂れる。

凡そ題を罵る文章は、須らく結末に於て規戒の意を垂れて、方めて余味有るべし。

(5) 結句有力

結句は力強く。

韓退之の「石処士を送る序」、歐陽永叔の「朋党論」、此の二篇の

文字は、結束一二字と雖も、実に万鈞の力有り。乃ち文法の絶妙なる者なり。

(6) 結束断制

論述してきたことをまとめ、ある判断を下す。

王陽明の「毛憲副の桐江書院に帰るを送る序」、末に断制文法を用ひ、前三段の意を繳む。亦た是れ一格なり。

おわりに

『文章指南』が、科挙の受験者を対象に作文の技術を指南する書であることは、「文章体則」中に次のようにいうことから明らかである。

・ 挙業に於て甚だしくは切ならざると雖も、其の詞義を觀れば、瀟洒夷曠、一点の風塵俗態無し。(神思飄逸則)

・ 此れ正に挙業者の当に之を取りて以て法と為すべき所なり。(文勢重疊則)

・ 這の様な文法、策論題に於て甚だ切なり。(兩柱通文則)

・ 近ごろ挙業の文字を見るに、題の宜しき所に因りて字様を借用す。正式に非ずと雖も、亦た巧思の在る所なり。(相題用字)

しかし、焔有光は、右の引用文の語調からも窺われるように、試験に合格するためだけの挙業には反対であった。有光三十歳の作、「山舎示学者(山舎にて学者に示す)」に於ても、それは明瞭である。

窃かに以為へらく、科挙の学は、得るを志すのみ。(略) 今学ぶ

所の者は卒業と雖も、読む所の者は、即ち聖人の書、称述する所の者は、即ち聖人の道、推衍論綴する所の者は、即ち聖人の緒言にして、修身・齐家・治国・平天下の事を明らかにする所以にして、吾が心の理より出づるに非ざるは無し。(略)願はくは、諸君相与に心を悉くして研究し、口耳剽窃を事とするなかれ。吾が心の理を以て書の意を会し、書の旨を以て吾が心の理を証すれば、則ち本源洞然として、意趣融液し、筆を挙げれば文と為り、辞達して義精しく、有士の程度を去ること、亦た遠からず。(略)

ところで、帰有光は、二十六歳(嘉靖十年、一五三一)のとき、同学の諸人と文社を結んでいる。当時県には南と北とに文社があり、帰有光は毎日早起してまず南社へ行き、午後は北社に赴いたという。^(註7)三十三歳(嘉靖十七年、一五三八)のとき帰有光は再び文社に入り、三十七歳のときには、安亭で学を講じた。この時、四方から来たり学ぶものが数百人にも及んだという。^(註8)

これらの受業生に、帰有光はいったい何を教えたのであろうか。「山舎示学者」でいうような理想論だけでは、帰有光に就いて学ぶ者はいなかったのではなからうか。

「山舎示学者」で、あえて学問・作文の理想を述べているのは、平常の授業が主に作文技術の伝授にあり、また受業生もそれを期待してやってきたことを推測させる。『文章指南』の「古文選」は、おそらく帰有光の授業の中で使用されたものであろう。「体則」は、帰有光自身の手になるものか、あるいは受業生がのちにまとめたもので、

いずれにしても『文章指南』の原形は、文社などでの講学のさいに出たものと思われる。

第八節の「題目と内容との関係」も、科挙の試験対策ということがありありとわかるが、「文章体則」は、帰有光の理想どおり、古文をよく読みこなしてこそ初めて理解される修辭の妙が、整然と要領よくまとめられてある。本稿での節分けは、「体則」の内容に即して分類したものであるが、「体則」の順番を移動したものはごく僅かで、ほとんどすべてがもとの順番どおりである。

「文章体則」は、一見、脈絡もなく単に羅列しただけのもののように思えるが、内容ごとにまとめてみると、具体的な作法技術が数項ある場合には総括の体則が設けられていたり、「原理」あり「総論」あり各論ありと、きわめて立体的な構成になっていることがわかる。「体則」自体そうであるが、構成をとってみても、編著者の科学的・合理的な資質が充分に窺われる。

「古文」は、一つの「体則」で律しきれるものではなく、いくつかの「体則」が有機的に結び付いて文学として鑑賞され得る作品となっている。すべての「体則」を充分理解したうえで、改めて「古文選」中の作品を読めば、古文をより深く味わうことができよう。

第一節の「文の原理」、第二節の「総論」によって、帰有光の文学観は明らかである。残された問題は、各「体則」の来歴。『文心雕龍』などの文学理論書や「文則」などの文理論書を丹念にあたる必要があるが、これについては後日を俟ちたい。

〔注1〕拙論「帛有光の「文」理論——載道と抒情の融合——」（筑波中国
文化論叢2、一九八三）に詳述してある。

〔注2〕テキストとして、広文書局印行の『文章指南』を使用する。これは、
台湾国立中央図書館所蔵の善本書稿を影印したものである。

〔注3〕「古文選集」の各集に収載される作品、文章体則、作家は、以下の
ようになっている。

仁集

易伝序（理則通用）程頤、博約説（理則通用）王守仁、前出師表（氣則通用）
諸葛亮、上高宗封事（氣則通用）胡銓、太史公自序（才識則通用）司馬遷、
袁州州學記（閔世教則附通用則）李觀、象祠記（閔世教則附通用則）王守仁、
与于襄陽書（占地歩則附通用則）韓愈、上田樞密書（占地歩則附通用則）蘇
洵、孔子從先進論（立論正大）蘇軾、積統（立論正大）方孝孺、諫逐客書（用
意奇巧）李斯、戰國策目錄序（遣文平淡）曾鞏、解嘲（造語蒼勁）楊雄、北
山移文（造語蒼勁）孔稚珪、鄭伯克段于鄆（叙事典瞻）左丘明、表忠觀碑（叙
事典瞻）蘇軾、晉侯使呂相絕秦（詞氣委婉）左丘明、報燕惠王書（詞氣委婉）
樂毅、歸去來辭（神思飄逸）陶潛、前赤壁賦（神思飄逸）蘇軾、後赤壁賦（神
思飄逸）蘇軾

義集

雜說一（譬喻）韓愈、雜說四（譬喻）韓愈、心科目時與人書（譬喻）韓愈、
捕蛇者説（譬喻）柳宗元、後十九日復上宰相書（譬喻則比体）韓愈、種樹郭
橐駝伝（譬喻）柳宗元、梓人伝（譬喻）柳宗元、稼説送張琥（譬喻）蘇軾、
送溫処士赴河陽軍序（譬喻）韓愈、明論（譬喻）蘇洵、李氏山房藏書記（譬
喻）蘇軾、進學解（譬喻則與体）韓愈、子産論重幣（引証）左丘明、諫論上
（引証）蘇洵、重答張籍書（將無作有）韓愈、送王陶序（化用経伝）歐陽脩、
與李札論（引事論事）独孤及、諍臣論（先抑後揚）韓愈、項羽賛（抑揚）司

馬遷、圻者王承福伝（抑揚並用）韓愈、与浮屠文暢師序（抑揚並用）韓愈、
与孟尚書書（抑中之揚）韓愈、管仲論（尚論成敗）蘇洵、賈誼論（尚論成敗）
蘇軾、秦始皇帝論（一正一反）蘇軾、後廿九日復上宰相書（正反翻応）韓愈、
原毀（正反翻応）韓愈、待漏院記（正反翻応）王禹偁

礼集

酒味色論（前後相応）国策、六経論（前後相応）宋濂、七儒解（前後相応）
宋濂、尊六経論（前後相応）王守仁、箕子碑（総提分応）柳宗元、四子論（総
提分応）王禕、先醒篇（総提分応）賈誼、後出師表（遂事条陳）諸葛亮、政
事堂（文勢層疊）李華、臧哀伯諫納郕鼎（文勢層疊）左丘明、広農頌（文勢
層疊）夏竦、上張僕射書（句法長短錯綜）韓愈、義田記（一級高一級）錢公
輔、文訓（一級高一級）王禕、晋文公問守原議（勢如貫珠）柳宗元、送薛存
義之任序（勢如走珠）柳宗元、師説（文勢如擊蛇）韓愈、潮州韓文公廟碑（文
勢如破竹）蘇軾、伊尹論（先虚後実）蘇軾、三槐堂銘（先疑後決）蘇軾

智集

屋錦堂記（下句載上句）歐陽脩、六一居士集序（下句載上句）蘇軾、岳陽樓
記（綴上生下）范仲淹、醉白堂記（綴上生下）蘇軾、心術（疊上転下）蘇洵、
荀卿論（疊上転下）蘇軾、原道（攔截上文）韓愈、春秋論下（設為難解）歐
陽脩、元年春王正月論（設為難解）王守仁、与韓愈論史官書（設為難解）柳
宗元、諱弁（含意不露）韓愈、対禹問（設為問答）韓愈、竜場生問答（設為
問答）王守仁、桐葉封弟弁（弁史）柳宗元、読孟嘗君伝（文短氣長）王安石、
送董邵南序（文短氣長）韓愈、諫院題名記（字少意多）司馬光、送孟東野序
（字少意多）韓愈、与陳給事書（双関）韓愈、玩易窩記（両柱通文）王守仁

信集

送王秀才序（下字影状）韓愈、論務農積貯疏（相題用字）賈誼、閩江樓記（題外生意）宋濂、樗隱記（駁難本題兼疊上軋下）王禕、武王伐紂論（回護題意）

（注6）『震川先生集』卷七
（注7）張伝元・余梅年著『婦震川年譜』

（本学助教教授・中国文学）

呂祖謙、春秋論（駕空立意）蘇洵、高帝論（駕空立意）蘇洵、范增論（死中求活）蘇軾、鼂錯論（死中求活）蘇軾、代張籍与李浙東書（立意貫說）韓愈、留侯論（立意貫說）蘇軾、駁復讎議（立意貫說）柳宗元、任相（繳応前語）蘇洵、御將（繳応前語）蘇洵、統楚語論（繳応前後）蘇軾、王者不治夷狄論（繳応前語）蘇軾、周公論（繳応前語）蘇軾、秦誓論（疊用繳語）歐陽脩、縱囚論（結意有余）歐陽脩、獲麟解（竿頭進步）韓愈、答韋中立論師道書（結末括心）柳宗元、上范司諫書（結末括心）歐陽脩、過秦論（結末推原）賈誼、異姓諸侯王表（抑揚則結末推原）班固、刑賞忠厚之至論（結末推原）蘇軾、阿房宮賦（結末垂戒）杜牧、六國論（結末垂戒）蘇洵、送石处士序（結句有力）韓愈、朋党論（結句有力）歐陽脩、送毛憲副致仕婦桐江書院序（結末断制）王守仁

△三十篇▽

因に一番収載作品の多いのは韓愈で、二十六篇、ついで蘇軾二十一篇、柳宗元十篇、蘇洵十篇、王守仁八篇、歐陽脩七篇である。

（注4）「看歴代名家文法」の違いは、対象とする作家が異なるからであるが、両書にともに言及される作家は記述が同じになっている。なお、

『古文関鍵』は韓愈、柳宗元、歐陽脩、蘇軾を中心とする唐宋の十一家についてその文体が説明されるのに対し、『文章指南』は左丘明、司馬遷、班固、韓愈、柳宗元、歐陽脩、三蘇、王陽明となっている。

（注5）「総論」が『古文関鍵』と酷似していることや、『文章指南』の書名が清代桐城派の始祖、方苞、劉大魁、姚鼐の三人が活躍したあとの乾隆期に始めて現れること、また、文にたいする根本的な認識が桐城派にきわめて近似していることなどから、『文章指南』を帰有光の編著とすることに疑義を挟むこともできるが、今それについては触れない。